九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

比喩との抗い ： ジャック・ロンドンの癩病表象

高野, 泰志

https://hdl.handle.net/2324/7172207

出版情報：The American review. 56, pp.93-112, 2022-03-25. Japanese Association for American Studies
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

比喩との抗い—ジャック・ロンドンの癩病表象

高　野　泰　志

56
The Japanese Association
for
American Studies
2022

比喩との抗い—ジャック・ロンドンの癩病表象

高　野　泰　志

はじめに

ハワイに対する白人の帝国主義的侵略に対抗する先住民コオラウを主人公にした「癩(らい)者コオラウ」（"Koolau, the Leper"）は，ジャック・ロンドンのハワイ先住民に対する共感と敬愛を描いた物語として高く評価されている。物語は先住民の視点から描かれ，彼らを追う白人たちこそが敵として描かれているのである。その一方でロンドンが社会進化論的発想で白人をほかの人種よりも優れた存在として捉えていたことも，多くの研究で触れられている。とりわけ問題になるのがエッセイ「黄禍」（"The Yellow Peril"）や「地の塩」（"Salt of the Earth"），あるいは近未来SF風の「比類なき侵略」（"The Unparalleled Invasion"）など，あからさまに人種的偏見が現れた作品である。研究者の間でもロンドンの人種観をめぐっては意見が対立しており，ジョン・R・エパージェシ（John R. Eperjesi）は「ロンドンについてもっとも首尾一貫したことを言うとすれば，フィクションであれノンフィクションであれロンドンの書くものは矛盾だらけであるということだ」と述べている[1]。本稿はロンドンの人種表象を複雑にした要因のひとつとして病の比喩を取り上げる。ロンドンは1907年にスナーク号で世界一周を目指し，南海に向かうが，その際にハワイで先住民を襲った癩病[2]の現実を目撃する。とりわけモロカイ島の癩病患者収容施設を訪ねたことは，ロンドンの人種観に大きな影響を及ぼしたと考えられる。癩病を取り巻く聖書以来の比喩がそれまでの社会進化論的人種観とぶつかり合うことで，ロンドンの人種に対する認識に大きな矛盾が生じることになったのである。

1　比喩の力

ロンドンはハワイを舞台にした作品を多数書いているが，その多くで癩病に触れている。とりわけ旅行記『スナーク号での航海』（*The Cruise of*

the Snark, 1911）には多数の癩病に関する記述が見られ，また同時期に書かれた短編集『高慢の家系』（*The House of Pride*, 1909）所収の6編の短編のうち，癩病に言及のないのは1編だけである[3]。癩病を直接テーマにした「癩者コオラウ」「さよなら，ジャック」（"Good-Bye, Jack"）「コナの保安官」（"The Sheriff of Kona"）はもちろんのこと，「チュン・アー・チュン」（"Chun Ah Chun"）はタイトルと同名の中国人がハワイで富豪としてのし上がっていく際に「未亡人や孤児やモロカイに移送された癩病病みから」土地を買ったというように，当時のハワイの重要な社会問題として癩病に言及される。また「高慢の家系」（"The House of Pride"）においては，道徳的に厳格な父親を誇りに思っていた主人公パーシヴァル・フォードが，その父とハワイ先住民とのあいだにもうひとりの息子がいたことを知る。その衝撃的な事実を知ったパーシヴァルは「それは突然父親が癩病病みであり，自分の血もまたその恐ろしい病に汚染されているかもしれないと知ったかのようであった」と，癩病の比喩を用いる[4]。

ロンドンはスナーク号で南洋に向かう以前から癩病に興味を持っていたが[5]，癩病を作品中で頻繁に描くようになったきっかけは，ハワイ滞在中にモロカイ島に置かれた癩病患者隔離施設カラウパパを訪ねたことにあった。しかしその癩病表象は最初からすでに矛盾をはらんでいた。ロンドンが癩病に関して最初に書いたのはモロカイ島の実情を伝えた記事「モロカイ島の癩病患者」（"The Lepers of Molokai"）である。『ウーマンズ・ホーム・コンパニオン』誌1908年1月号に掲載されたこの記事は，のちに『スナーク号での航海』にも収録されている。ロンドンの妻チャーミアン（Charmian London）によると，そもそものきっかけはハワイ衛生局の局長ルーシャス・E・ピンカム（Lucius E. Pinkham）を夕食に招いた際，ロンドンがモロカイに行ってみたいと打診したことにあったという。ピンカムはその申し出を快諾する。「癩病患者居留地の記述がとてつもない誤りだらけであり，どうやら［ピンカムは］ロンドンが正しい実態を書いてくれると信じていた」[6]。

ロンドンは妻とともにモロカイ島で5日間滞在した直後に「モロカイ島の癩病患者」を書き，そこで「過去に描かれてきたようなモロカイの恐怖など存在しないという主張」をしている[7]。ロンドンはアメリカ独立記念日を祝う患者たちのお祭り騒ぎなどの描写で[8]，この居留地に住む人々がいかに幸せであるかを強調し，以下のように結論づけるのである。

癩病は恐ろしい。それを否定することはできない。しかしこの病気についての多少の知識と感染力の程度から考えると，わたしはむしろ結核のサナトリウムで過ごすよりはモロカイ島で余生を過ごすほうがはるかにましだと思う。合衆国で市や郡の運営する貧窮院に行けば，あるいはほかの国の似たような施設に行けば，モロカイと同じくらい恐ろしい光景を見つけることができるだろう。そしてそういった光景を全部合わせたら，モロカイの比ではないくらい恐ろしいものになるはずだ。実際もし余生を過ごすのを強いられるのがモロカイか，ロンドンのイースト・エンドか，ニューヨークのイースト・サイドか，あるいはシカゴのストック・ヤードか，どれか選んでよいのなら，私なら議論の余地なくモロカイを選ぶ[9]。

その後ロンドンが語るのは，癩病に感染していなかったことが発覚したためにホノルルに戻された患者たちが，あえて癩病患者と結婚したり，施設の世話人になったり，様々な手段でモロカイ島に戻ろうとする様子である。このようにロンドンはモロカイ島が快適な場所であることを印象づけようとするのである。

「モロカイ島の癩病患者」がハワイの被る誤ったイメージを払拭してくれたという理由で，ロンドンはロリン・サーストン（Lorrin Thurston）をはじめとするハワイの白人上流階級に受け入れられることになった。そのような経緯を考えると，モロカイ島滞在から1年近くたってから書かれた癩病を描く3つの作品が「モロカイ島の癩病患者」を大きく覆す内容になっていることは奇妙に思えるかもしれない。かつての友人サーストンはこれらの短編小説を見て，匿名記事で「ここでの癩病の状況を大げさに騒ぎ立て，事実を捻じ曲げ，真実が目的に適わないと見るや嘘をでっちあげ，事態を完全に偽って伝えているのだ」とロンドンを非難している[10]。とりわけ1908年6月10日に書かれた[11]「さよなら，ジャック」は「モロカイ島の癩病患者」を真っ向から否定する内容であると言ってもよい。物語は名前のない一人称の語り手がジャック・カーズデイルの人物像を描き出す。カーズデイルは「肝のすわった男」であるが[12]，「癩病に興味があった」語り手に，ハワイの癩病について非常に詳しく語って聞かせる。カーズデイルの語る内容は先の「モロカイ島の癩病患者」の記述とそっくりである。

「私に言わせれば連中はあそこにいて幸せなんだ」カーズデイルは

断言した。「それに健康に何の問題もない島の外の友人や親戚たちと比べて，ずっといい暮らしをしてるんだ。モロカイの恐怖なんてたわ言にすぎんよ。なんだったら世界中の大都市にある病院やスラムに連れてって，千倍もひどい恐怖を見せてやってもいい。生きながらの死人だって！かつて人であった生き物だって！ばかばかしい！そんな生きながらの死人が独立記念日に競馬を楽しんでる様子を見てみればいいんだ。中にはボートを持ってるやつもいる。そのうちのひとつはエンジンのついた大型ボートだ。連中はただ楽しい時間を過ごすだけでいいんだ。食べ物も，家も，着るものも，医療も，なんだって好きなように与えられているんだ。準州政府［当時ハワイはアメリカの準州であった］が面倒を見てくれるんだ。ホノルルよりずっと気候もいいし，景色は素晴らしい。俺が余生をそこで過ごしたいくらいだ。ほんとに素晴らしい場所なんだ」[13]

ここでカーズデイルは誤って伝えられたモロカイのイメージをただそうとしており，1年前にロンドンがピンカムの求めに応じて試みたまさにそのことをしていると言えるだろう。そしてもちろん「肝のすわった」カーズデイルは「癩病など怖くない」と癩病の恐怖を否定する[14]。

ある日そのカーズデイルは語り手に「モロカイに移送される癩病患者が泣き叫んでいる様子」を見物に行こうと誘う。「連中の悲しみに嘘偽りはないが，1年後に衛生局が連中をモロカイから連れ出そうとしたらずっと激しく泣き叫ぶんだからな」と言って，カーズデイルが語り手と桟橋に行くと，船に乗せられた患者の中にカーズデイルと肉体関係を持っていたらしい女性歌手がいて，カーズデイルに「さよなら，ジャック」と声をかけるのである。そのとたんにそれまで何ものをも恐れることのなかった「肝のすわった」カーズデイルは，「これほど圧倒的な恐怖に襲われた男などほかにいなかっただろう。桟橋でよろめいたその顔は髪の毛の付け根まで蒼白で，服の中で身体が縮んで干からびてしまったようだった」と描かれる。そして船が出港すると自分の馬車に駆け戻り，癩病の権威と言われるハーヴェイ医師のところに向かうのである。「座席に沈み込むと息を切らし，喘ぎ声を出した。顔色はますます白くなっていた。唇を引き締め，汗が額と上唇に吹きだしていた。恐ろしい苦悶に囚われているようであった」と語り手は伝える[15]。つまり物語は癩病患者の苦しみに無頓着なカーズデイルの偽善性を暴き出しているのであり，自分もモロカイで余生を過

ごしたいと言いながら，実際にその可能性に直面したとたんにカーズデイルの「肝」はつぶれてしまうのである。

しかしこの物語を，単純に偽善を描くものとしてだけすませてしまうにはあまりにも不可解な点が多い。先ほども述べたように，1年足らず前に作者ロンドン自身が書いた記述とほとんど同じ内容をカーズデイルに語らせ，その人物を偽善者として突き放しているのである。また当然のことながら偽善的なカーズデイルの名前に，自分と同じ「ジャック」という名前を与える自己言及性は論じるに値するだろう。主張内容の変化だけを見れば，かつては癩病患者の苦しみに十分共感していなかったという反省が自己批判の物語を書かせたという解釈も可能であろう。しかし「癩病患者が泣き叫んでいる様子」を見物するという，他者の苦しみを娯楽として消費するカーズデイルの不道徳性まで描きこんでいることからも，ここにはたんなる「変化」という以上の複雑な矛盾を感じるのである。実際「さよなら，ジャック」の終盤で船に乗り込む癩病患者の身体的描写は必要以上にグロテスクに描かれており，むしろサーストンが批判したように「さよなら，ジャック」の方こそ癩病患者の苦しみを娯楽として提供しようとしているという非難もあながち的外れではない。ロンドン自身が意見を変えたというよりは，もともとロンドンの中にあった矛盾が，もうひとりのジャックと，そのジャックに批判的な目を向ける名前のない語り手[16]とに分裂したように見える。

分裂しているとするならばその根幹にあるのは癩病への恐怖ではないだろうか。癩病の恐ろしさを過大評価するのも，過小評価するのも，どちらも恐怖の裏返しであるように思えるからである。「さよなら，ジャック」で「肝のすわった」カーズデイルが恐怖を感じるようになるきっかけは，自らの感染の可能性であった。それまでは白人がかかる可能性を高く見積もってはいなかったのである。そう考えると興味深いのは，どのテクストにも白人患者がひっそりと書き込まれていることである。白人の癩病感染者たちは数が少ないこと，ほとんどいないことを強調されながらも必ずその存在が刻印されている。「モロカイ島の癩病患者」では「癩病患者の大半はハワイ人である」と言いながら，ノルウェイ人，アメリカ人，ポルトガル人が少数混じっていることを付言しており[17]，「さよなら，ジャック」ではカーズデイルは「自分やほかの白人が癩病に感染する可能性など百万にひとつもない。ただ後になってから同級生のアルフレッド・スターターが感染し，モロカイに行ってそこで死んだことを打ち明けたが」と[18]，大

丈夫と言いながらわずかな不安が混ざりこんでくるのである。

実際に白人に感染者がいるにもかかわらず，「白人が癩病に感染する可能性」がほとんどないと考えるのは，社会進化論にもとづく人種的偏見の影響であると言える。癩病患者の圧倒的多数がハワイ先住民であり，白人患者がごく少数であることは，適者生存の原理を表すものでなければならず，つまり先住民が癩病に感染しやすいのに対して白人は生まれつき癩病感染を免れていると考えるのである。そしてその人種的偏見は，後に詳しく触れるように癩病がもつ汚れや罪を意味する比喩の力によって強化されることになる。「癩病患者が汚れている（unclean）ことは強調されねばならない。この病気についてわかっていることを念頭に置くと，癩病患者の隔離は厳しく維持されなければならない」という「モロカイ島の癩病患者」の一節は，聖書以来の癩病のもつ比喩を受け継いでいると言えるだろう[19]。レビ記に記されているように，「患部のあるらい病人は，その衣服を裂き，その頭を現し，その口ひげをおおって『汚れた者，汚れた者』と呼ばわらなければならない。その患部が身にある日の間は汚れた者としなければならない。その人は汚れた者であるから，離れて住まなければならない」のである[20]。「コナの保安官」や「癩者コオラウ」で癩病が聖書の比喩で語られていることからも（「あれの印が額に刻印されている」「獣の印」[21]），ロンドンが癩病を「汚れ」であり，罪であると見ていたことは間違いない。「高慢の家系」でパーシヴァルが父の異人種混交を癩病の汚染であると考えるのは，まさしくこの社会進化論と病の比喩との結合なのである。

したがってハワイの次に，ハーマン・メルヴィルの描いた『タイピー』（*Typee*, 1846）の舞台を見ようとマルケサス諸島のヌクヒヴァに赴いたロンドンは以下のように述べる。

> 状況を鑑みるに，以下のような結論に至らざるを得ない。つまり白人は不純で腐敗した環境で繁殖している人種なのだ。だがこれは自然選択の原理で説明できる。我々白人は微生物との戦いを勝ち抜いてきた何千世代もの生き残りの子孫なのだ。我々がまれにこういった微小な敵に屈してしまうような体質で生まれてきたとしても，そのような個体は速やかに死滅してしまったのだ。敵に耐性のある個体だけが生き残ったのだ。生き残った我々には免疫があり，つまり適者――すなわち敵性微生物の世界で生きるのに最も適しているということなの

だ。かわいそうなマルケサス島人はそのような自然選択を通り越してこなかった。彼らには免疫がなかったのだ[22]。

白人に滅ぼされたマルケサス島人を憐れみ，白人侵略者を批判しているため[23]，白人の方が「汚れ」を体現する存在とされているが，この比喩の反転はそれ自体同じ機能を果たしている。つまり白人を「適者」として安全圏に囲い込むのである。ハワイ先住民に共感し，白人の帝国主義的支配を批判的に描いた「癩者コオラウ」でも，癩病にかかっているのは先住民でありながら，その先住民を捕らえようとする白人兵士たちの方がまるで病原菌であるかのように描かれる。「たとえ千人殺そうと，海辺の砂のように，また立ち上がって俺を狙ってくるのだ。それもどんどん数を増やしながら」[24]。ここにはヌクヒヴァの記述と同様の図式が見られる。病原菌を保有する汚れた存在として白人を批判的に描きながらも，白人の方は感染を免れ，病に襲われるのは先住民なのである。

しかしここでロンドンの記述にはまたしても矛盾が見られることを指摘しておかなければならない。白人が癩病を免れているのは不純で腐敗した環境で「汚れ」とともに過ごしてきたからであり，「汚れ」と無縁のマルケサス島人は清らかな環境に隔離されていたからこそ，適者となれなかった。一方で「モロカイ島の癩病患者」では「汚れた」「癩病患者の隔離」が「厳しく維持されなければならない」と主張する。白人が「汚れ」と共存してきたために適者となったと述べながら，それでいて「汚れ」を自分たち白人から隔離しなければならないとするのは矛盾した見解であるはずである。自分たちが「適者」であるとしながらも，「汚れ」に触れることを恐れていることから，ロンドンがいかに癩病を恐れ，その理解に矛盾をきたしていたかが見て取れるだろう。

このようにロンドンは癩病を社会進化論的に見ながらも，そこには常に矛盾が生じ，それゆえに不安がつきまとっている。それが「さよなら，ジャック」の自己言及的な分裂となって表れているのである。「コナの保安官」はもっと直接的にこの不安を描いた作品であると言えるだろう。主人公ライト・グレゴリーは快活で健康な若者である。「他に何を求めるものがあろうか，堂々たる身体を持ち，鋼のような体格で，あらゆる普通の病気から免れ，控えめで健全な魂の持ち主なのだから。身体的には完璧であった。これまでの人生で一度も病気にかかったことがなかったのだ」[25]。物語はこのグレゴリーが楽天的に抱く自分の健康への信頼（faith）と，そ

の信頼に対する是認（sanction）が奪われることを描いている。つまり感染してはならない白人が癩病に感染する物語なのである。このように見てくると，ロンドンが自分の感染する可能性を低く見積もっているにもかかわらず，そのわずかの可能性におびえている様子が見えてくる。むしろおびえているからこそ感染の可能性を低く見積もらなければならないのかもしれない。グレゴリーの感染は決してあってはならないことであり，感染したグレゴリーはモロカイからも連れだし，西洋と東洋を分かつ壁の向こう側へと隠さなければならないのである。この壁に関しては本稿の最後で改めて検討する。

2　崩壊する比喩

スーザン・ソンタグ（Susan Sontag）が古典的な名著『隠喩としての病』（*Illness as Metaphor*, 1977）で指摘するように，病には常に隠喩がつきまとう。ソンタグは「私の言いたいのは，病気とは隠喩などではなく，従って病気に対処するには――最も健康に病気になるには――隠喩がらみの病気観を一掃すること，なるたけそれに抵抗することが最も正しい方法であるということ」と主張する[26]。前節で述べたように，ロンドンは自分が白人であるために癩病にはかかりにくいと考えていた。実際に白人感染者がいるにもかかわらず，癩病は異人種を襲う病であり，癩病のもつ隠喩の重荷は白人が背負うものではなかった。この癩病観が決定的に揺らぐ出来事が癩病をめぐる3つの作品を書いた直後にロンドンの身に生じている。ロンドンの伝記を書いたジェイムズ・L・ヘイリー（James L. Haley）によると，ロンドンは自分の手に現れた乾癬を癩病感染だと疑ったという。「突然，彼は恐怖に囚われた。［モロカイ島の］カラウパパで住民たちとあまりにも自由に接したために癩病に感染したかもしれないと思ったのだ」[27]。その後シドニーの病院でただの乾癬に過ぎないと診断されるものの，ロンドンはスナーク号での世界一周旅行を諦めることになるのである。カリフォルニアのビューティ牧場に戻ったあともロンドンはしばらく自分が癩病にかかっているのではないかという不安を抱いていたらしい[28]。その不安の中でロンドンは「覚書」と題されたメモに「哲学，死を恐れない，生を愛しながら。生を追求するのだ。それから病を恐れない――癩病を。怪我を恐れない，痛みは避けてもよい」という一節を書き記している[29]。病の代表として癩病が記されていること，そして「恐れない」とあえて言わなければならないことからも，ロンドンが自らの癩病感染をどれほど恐れ

たかがよく見て取れるだろう。一度自分が感染する可能性を知った以上，もはや隠喩の力から逃れることはできない。ちょうど「コナの保安官」でライト・グレゴリーがポーカーで打ち負かしたシュルツのように，確率を信用できなくなるのである。楽天的に自分の幸運を信じて恐ろしく小さな可能性に賭けたグレゴリーに敗北してからは，シュルツは「もう二度と同じようなやり方でゲームをすることができなかった。それ以降自信を失ってしまい，動じやすくなってしまった」[30]。実際にロンドンも言うように癩病の感染力は高くはないが，感染の確率がいかに低かろうと一度でもその可能性を思い知るとそれに賭けることができなくなる。その結果，感染の現実を越えた強い隠喩に囚われることになるのである[31]。

そもそも病を隠喩に包むのは，病への恐怖をおさえるためであったはずである。本来は病気そのものと関係のない道徳的逸脱やタブーの侵犯が病の原因であるとすることによって，正しいふるまいをすれば病を避けることができると考えて安心することができたのである。そしてその安心を確保するために，病にかかった人々は罪びととして断罪され，恥ずべき存在として社会を追放されることになる。1910年に書かれた『緋色の病』（*The Scarlet Plague*）は，この病のもつ比喩の力が機能不全を起こし，崩壊する様を描いた中編小説である。『緋色の病』は癩病に関する小説ではないが，細部の記述からロンドンが癩病を意識していたらしいことは読み取れる。

物語は2073年を舞台にしており，その60年前に出現した緋色の病と呼ばれる感染症が人類の大半を死滅させた様子を，大学教授ジェイムズ・ハワード・スミスが3人の孫に語って聞かせるという構造になっている。物語中には癩病に関する言及が二度見られる。一度はスミスが学のない孫たちに細菌の説明をする際に数多くの病名とともに列挙される。大半が架空の病名である中で，実在の病としてペストなどとともに癩病が登場する。「癩病という病気があった，恐ろしい病だった。私が生まれる100年前に細菌学者は癩病の病原菌を発見した。学者たちはその病原菌を知り尽くした。写真も撮った。私も見たことがある。だがそれを殺す方法は見つけられなかったのだ」[32]。架空の病気を含めてほかのすべてが撲滅されたとされているのに対して，ロンドンの想像力の中では遠い未来においても癩病は撲滅されず，生き残っているのである。

もう一か所は終盤に見られる比喩としての病である。特権階級にある権力者の妻が日傘を落としたとき，使用人がそれを手渡そうとするのに対し

て「女性はまるでその使用人が癩病患者であるかのように飛びの」くのである[33]。この一節が興味深いのは，モチーフになっている緋色の病が様々な比喩で語られる中（「燎原の火のように顔や身体に広がった」「人々は蠅のように死んでいった」「まるでこの世の終わりのようだった」など[34]，それ以外の事象を別の病の比喩で語っていることである。ここには病が恐怖を誘う比喩で表現されるとともに，ほかの恐怖が病の比喩で語られるという相互作用が働いており，現実と比喩が反響することによって病の恐怖が増幅されている。

さらに癩病への直接の言及ではないものの，比喩と病の関係として興味深いのは病名の「緋色の病」である[35]。学のない孫たちになぜ「赤」ではなく「緋色」ということばを使いたがるのかと問われ，スミスはそれにうまく答えられない。「『赤と呼ぶのは正しくないのだ』というのが答えであった。『この伝染病は緋色だった。顔じゅう，身体じゅうが1時間ほどで緋色に変色する。よく知ってるんだ。たくさん見てきたんだ。その私が言うのだから，あれは緋色だったのだ，なぜなら――そう，なぜならあれは緋色だったからだ。ほかのことばなんか当てはまらない』」[36]。作品中では学のある人物は緋色を用い，学のない労働者階級がたんに赤と言うので，大学教授であったスミスが社会階層の差別化を図っていることは間違いないだろう。しかしそれ以上に「緋色」（scarlet）が聖書的な言葉であることには注意を向けるべきである。黙示録の緋色の女をはじめ，聖書では緋色は罪の色である（「主は言われる，さあ，われわれは互に論じよう。たといあなたがたの罪は緋のようであっても（though your sins are like scarlet），雪のように白くなるのだ」[37]）。つまり病を緋色と呼ぶことには，病を罪に対する罰として考えようとするメカニズムが見て取れるのである。先にも引用したレビ記に代表されるように，聖書では罪を犯したことに対する神の罰の代表的な表象のひとつが癩病であったことを考えると，緋色という聖書的イメージの名をもつこの病が，たとえ兆候としては癩病に似ても似つかないものであったとしても，癩病への恐怖を意識していることは疑えないだろう。

そもそも『緋色の病』は社会主義者のロンドンらしく，資本主義の弊害を暴き出した物語でもある。パンデミックの影響で無法状態に陥った街中には野蛮に回帰した暴徒が建物に火をつけ，人々に襲いかかっている。「文明のただなかで，スラムや貧民街の底には野蛮で未開の種族が繁殖していたのだ。そして今，この災害のさなか，連中は野性の獣のように我々に牙

をむき，滅ぼしたのだ。そして自分たちをも滅ぼすことになったのだ」[38]。そしてきわめて階級意識の高い語り手スミスは自分たち支配層と，労働者階級を決然と区別する。パンデミックのあと，初めて出会った生き残りのお抱え運転手が，かつての上流階級の女性ヴェスタを使用人のように扱っていることを，スミスは以下のように語る。

> 「お前たちにはその状況のひどさがわかるまい。お抱え運転手というのは召使だ，わかるか，召使なんだ。彼女のような人に頭を下げてへつらう連中なのだ。彼女の方は血筋も結婚相手も支配者だった。何百万もの人々の命運を，お抱え運転手みたいな連中の命運を，桃色がかったその手に握っていたのだ。疫病が蔓延する前だったら，お抱え運転手みたいなやつがほんのちょっとでも触れようものなら，それはまさしく汚染だった。そういえば実際に見たことがある。あれはたしかゴールドウィン夫人だった。国の有力者の妻だった人だ。搭乗台でちょうど自家用飛行船に乗り込もうとしていたときにうっかり日傘を落としてしまったのだ。召使がそれを拾い上げたのだが，つい自分で手渡そうとした――彼女に，この国でもっとも偉大で高貴な女性のひとりに，だ！彼女はまるでその使用人が癩病患者であるかのように飛びのいて，秘書に受け取るよう身ぶりで示した」（強調は引用者）[39]

一部は先にも引用したが，ここで明らかなように，スミスの頭の中で下層階級は「汚染」であり，すなわち病の隠喩で語られる存在なのである。

このようにスミスは病を聖書的罪の隠喩で語りながら，同時に下層階級を病として捉えている。スミスにとって病という罰を受けるべきなのは道徳的に堕落した下層階級でなければならないのだ。しかし物語の中心的な主題はその不道徳を罰する報いとしての隠喩が機能していない様子を描くことにある。やっと巡り合えた生き残りの人類であるお抱え運転手のことを，スミスは次のように言う。

> 「あいつは乱暴で不誠実な男だった。どうして疫病の病原菌があいつを見過ごしたのか，まったく理解できない。昔から絶対的正義といった抽象的な概念はあったが，実際この世の中に正義なんてないみたいだ。どうしてあいつが生き残ったんだ？――あんな邪悪で不道徳なけだもの，この地球上の汚点，おまけに残忍で容赦のない獣じみた詐欺

師が」[40]

スミスが「理解できない」のは，スミスが病を罪の隠喩として捉えており，病にかかるのは汚れた罪人であると考えているからである。そして病にかかるのがふさわしい罪人と病を免れる正義の側とを分かつのが社会階層であると考えているのである。スミスが明らかに鼻持ちならない階層意識をもつ人物として描かれていることからも，ロンドンはスミスのこの考え方を問題視しているらしいが，スミスの考え方には社会を支配する適者こそが正義であるという社会進化論的な発想が深く根を下ろしている。しかしスミスがどう考えようと，病は社会階層にかかわりなく人々を襲う。聖書的罪の隠喩はここで立ち行かなくなるのである。

病の比喩とは，いわばそれ自体がイデオロギー的構築物であり，だからこそ明らかに矛盾する状況を目の前にしても，強い生命力をもって人々の思考を捕らえ続ける。スミスだけでなく，先にも引用したタイピー族へのロンドンのまなざしにもまた，比喩に囚われた思考が見て取れる。ロンドンはスミスとは違って支配された側に共感を寄せ，白人の方を汚れた存在として捉えていたが，あくまで病を免れた支配者と病にかかる他者という区別を維持していた。しかしあらゆる証拠が指し示すように，実際には病原菌は人種や道徳などを区別することなく無差別に襲うのである。非白人に同情的な「癩者コオラウ」をはじめ，中国人の視点から描いた「チュン・アー・チュン」など，非白人の視点から物語を語っていることからもわかるように，ロンドンはスミスと違って支配階級を無意識に上位に置くような偏見に陥っていたわけではない。しかし一方では支配者と被支配者を分け隔てる境界線を壊すほど，時代のイデオロギーから自由であったわけでもなかった。帝国主義的侵略を被った異人種に同情的でありながらも，イデオロギー的に構築された病の比喩がその異人種への共感に抵抗するのである。だからこそ適者生存の原則どおりに動かない病をこれほど恐れた。そして病の比喩を解体しないままに支配される人々に共感するために，必然的にロンドンの作品には解決不能な矛盾が生じるのである。

比喩の機能不全を描くロンドンは，もしかすると『緋色の病』でこの比喩の解体を目指していたのかもしれない。新たな比喩を創生する意図があったのか，この作品の結末近くの記述は明らかに創世記を意識した語りになっている。残された数少ない人類が子孫を増やすための「エデンの園」を形成することに言及されたあと，創世記の記述を思わせる書き方で，増

えつつある人類の家系図が列挙される。その中でスミスは以下のような不吉な演説をする。「私たちは急速に増えつつある。文明に向けての新しい階梯を登る準備をしているのだ。やがて人口が増えると広がりゆかねばならないだろう。今から百世代もたてば期待してよい，私たちの子孫がシエラネバダを越え，何世代にもわたってゆっくりと染みだしてゆき，この巨大な大陸を渡って東部を植民地化するに至るのを。それこそが世界に広がろうとする新しいアーリア人的推進力だ」[41]。スミスの階級意識が強調されていることからも，作者ロンドンはこの白人至上主義的発言から距離を置いているのかもしれないが，一方でこのスミスの思考の枠組みに代わるものが提示されていないため，その距離がどれほどの距離なのか判然としない。比喩に束縛されて，ロンドンの姿勢は決して明確にはならないのである。

3　もうひとつの比喩

「癩者コオラウ」で主人公コオラウは仲間たちに語りかけて以下のように演説する。

> 「かつて俺たちの馬が草を食んでいた場所に作られた何マイルにもわたるサトウキビ農場で俺たちが働こうとしないからといって，奴らは海の向こうから中国人の奴隷を連れてきた。そしてその連中と一緒に，中国の病がやって来たのだ――俺たちはその病にかかり，そのせいで奴らは俺たちをモロカイに閉じ込めようというのだ。」[42]

ここに書かれているように，当時ハワイでは癩病は中国から持ち込まれた病であると信じられており，「中国の病」と呼ばれていた。このことを前提にすると「コナの保安官」の主人公ライト・グレゴリーが上海に連れ出される結末は興味深く見えてくる。中国からやってきた病を中国に戻す物語として読めるからである。

グレゴリーは友人カドワースに「普通の病にかかる死すべき人間とは異なった種族に属していた。気高い存在であり，ありきたりの病気や不幸が触れられる男ではなかった」と描かれるが，この神々しいばかりに全能の男は，いわば癩病を免れた白人の偶像なのである。したがってこの物語は前節で述べた病の比喩をそのまま具現化するアレゴリーとして読める。それほどまでに白人の希望を体現し，比喩の守り手となったグレゴリーは，

癩病感染が発覚したとたんに隠蔽されなければならない。カドワースはグレゴリーの感染を知ったとき，以下のような動揺を見せる。

> 「私には何もできなかった。兆候が表れるのがわかったが何もできなかった。まったくどうすればいいと言うんだ？目を向けると，不吉で見誤りようのないあれの印が額に刻印されているのだ。ほかの誰も気づいていなかった。私はあれほど彼のことを愛していたから，たぶんそうに違いない，だから私だけにはわかったのだ」[43]

「見誤りようのないあれの印」が現れているにもかかわらず，カドワースは「ほかの誰も気づいていなかった」と言う。グレゴリーを「愛していた」「私だけ」にわかったと言うが，実際混血のスティーヴン・カルーナがグレゴリーに向かって感染していることを暴露した際，周囲にいた白人たちはみな知っていた様子である。グレゴリーの感染はあってはならないことであり，したがって誰もが「私だけ」が知っていると考えていたのではないだろうか。「私はあの印が日焼けであると信じようとしたが，できなかった。私には知識があった。そして私以外に誰も気づかなかった」[44] と，目を背けようとしながらもそうできず，しかし自分だけが知っていることとして集団的に隠蔽し続けるのである。

カドワースや友人たちは，自分たちの偶像であるグレゴリーがモロカイ島にいることを許容できない。「私たちにはそんなことは我慢できなかった」[45] と言ってモロカイ島に乗り込み，グレゴリーを救出して上海に送り出すのである。つまりモロカイ島という目に触れる場所ではなく，病原菌のそもそもの由来とされた中国という，目の届かない場所に置かなければならないのである。ここには当時の黄禍論の影響があっただろう。この黄禍論は黄色人種が病原菌であるというもうひとつの比喩を呼び込むことになる。それを典型的に描いているのがロンドンがスナーク号で航海に出る直前に書かれた「比類なき侵略」である。この作品は日本の侵略によって近代化された中国が，コントロール不能なほどに人口を増やし，国境を越えてあふれ出す様子を描く。あまりにも人口の多すぎる中国に対抗する手段がなくなった西洋諸国は，中国全土に細菌をばらまいて全滅させるのである。この作品はしばしばロンドンの白人至上主義的な考え方を表す作品として言及されてきたが，近年ではむしろロンドンがそういった偏見を脱却している証拠として読む研究も現れている。たとえばジーン・キャンベ

ル・リースマン（Jeanne Campbell Reesman）はこの作品を「人種に根差す敵意とパラノイアに対する切迫した警告」であると読んでいる[46]。確かに物語の冒頭で事の本質として提示されているのは，共通する言語の不在である。

> 西洋人が考慮に入れ損ねているのは以下の事実である。すなわち自分たちと中国の間には共通の心理的言語がないということである。彼らの思考方法は根本的に異なっているのだ。近接の語彙も存在しない。西洋人の精神は中国人の精神を探ろうとしてもさほどの深みに到達するまでに不可解な迷宮に迷い込んでしまう。中国人の精神は西洋人の精神を探ろうとしても同じくらいすぐに，物言わぬ理解を拒む壁に突き当たる。すべて言語の問題なのだ。西洋の概念を中国人の精神に伝えるすべはない[47]。

この前置きを見ると，この作品は西洋と東洋の相互不理解を放置すると，終盤で描かれるような悲劇的な事態に至るのだと主張しているように見える。共通言語をもたず，互いに何を考えているのか理解できないために，西洋人から見た中国は巨大な動物の隠喩で語られ（「[送り込まれた軍隊は] 中国のうつろな胃袋に飲み込まれてしまった」「100万の兵を送りたまえ。500万を送りたまえ。そんなものはたやすく飲み干してやろう。ふん，そんなのは何でもない，ただの粗末な箸休めだ」「中国のたっぷりとした胃袋には，投げつけられた地球上のすべての軍勢を収めるだけの余裕があった」など），そして理解不能な移民の波は病原菌のように見える（「あふれかえったおびただしい人の洪水をせき止めることなどできなかった。（中略）そうこうしているうちに黄色い洪水は噴出し，アジアを覆った」[48]。このコントロールを失ってあふれ出す人の波は徐々に近隣諸国を侵食しながら地球上に広がっていくが，まさしく感染症を思わせる。いわば無理解が獣と病の比喩を持ち込んでいるのである。最晩年に環太平洋クラブで行った演説においても，ロンドンは「世界民族のことば」を獲得することを願っているが[49]，「比類なき侵略」を書いた段階でも西洋と東洋の間にある「物言わぬ理解を拒む壁」を壊すことを願っていた可能性は否定できない。

しかし病原菌としての中国に細菌を与えるこの物語が奇妙なほどに「コナの保安官」と類似していることも同時に指摘しておかなければならない。

病原菌の由来とされる中国に癩病患者を送り込むことと，病原菌をあふれさせる国に病原菌をばらまくことは同じ構造である。ここで重要なのは「壁」の比喩である。いかにロンドンが心から西洋と東洋の間の「壁」を壊すことを願っていたとしても，感染症はその比喩を反転させる。「壁」は無理解の壁であるかもしれないが，感染症の現実を目の前にしたとき，隔離の壁にもなるのである。ロンドンが「モロカイ島の癩病患者」でしきりに繰り返していたように，隔離が必要であるなら壁は必要なのである。壁があると病の比喩を生み出す。一方で壁がないと病を封じ込めることができない。またしてもロンドンの人種観は病の比喩に囚われ，矛盾をきたすことになる。ロンドンの異人種表象に捉えがたい側面があるとするならば，それはこのように病の比喩が表象と絡み合い，多重の意味を産出してしまうからである。中国からあふれだす人の洪水をロンドンは以下のように描く。「いまや中国は帝国領土の境界線を越えてこぼれだした——ただそれだけだった。ただ氷河のように着実に，ぞっとするほど緩慢な勢いで，近隣の領土にこぼれだしていくだけなのだ」[50]。この記述は先にも引用した「癩者コオラウ」で主人公に迫る白人たちの記述に似ていないだろうか。あるいはスミス教授が夢想する，シエラネバダを越えて広がる新しいアーリア人の「推進力」に似ていないだろうか。ロンドンの作品において病の比喩は，白人と異人種，支配者と被支配者を厳然と分け隔てながらも，同時にそれらを混同させるという矛盾した働きをしている。その結果，読み手はロンドンの政治性，人種観を明確に特定できなくなってしまうのである。

註

1) John R. Eperjesi, *The Imperialist Imaginary: Visions of Asia and the Pacific in American Culture* (Hanover: Dartmouth College Press, 2005), 105. また，ロンドンが人種的偏見を乗り越えていたとみる研究の代表的なものとしてたとえば以下を参照。Jeanne Campbell Reesman, *Jack London's Racial Lives: A Critical Biography* (Athens: University of Georgia Press, 2009); Daniel A. Métraux, *The Asian Writings of Jack London: Essays, Letters, Newspaper Dispatches, and Short Fiction by Jack London* (Lewiston: The Edwin Mellen Press, 2009). 一方，ロンドンが人種的偏見を十分に乗り越えられていなかったと考える研究には先述のEperjesiに加え，以下のようなものがある。Christopher Marc McBride, *The Colonizer Abroad: American Writers on Foreign Soil, 1846-1912* (New York: Routledge, 2005).
2) 現在はハンセン病（Hansen's disease）と呼ぶべきであるが，ロンドンが作品を書いた時代を考え，また癩病（leprosy）ということばのもつ隠喩を重要な問題点としているため，あえて本稿では癩病と呼ぶ。

3) これらの短編の癩病表象がハワイの白人を激怒させたため，この短編集はその後長くハワイでは発売禁止になっていた。後にハワイを再訪したロンドンは，ハワイを舞台にした短編をさらに7編書いた。これらは死後出版された短編集『マカロアのむしろで』(*On the Makaloa Mat*, 1919) に収録されているが，「脛骨」("Shin Bones") を除いて癩病に触れられていないのは先の短編集の癩病表象が非難を招いた影響であったと考えられる。
4) Jack London, *Stories of Hawaii*, ed. A. Grove Day (New York: Appleton-Century, 1965), 77, 35.
5) ロンドンは1907年のハワイ旅行以前から癩病に興味を持ち，すでにいくつかの癩病施設を訪れていた。James Slagel, "Political Leprosy: Jack London the 'Kama'āina' and Koolau the Hawaiian," in Leonard Cassuto and Jeanne Campbell Reesman eds., *Rereading Jack London* (Stanford: Stanford University Press, 1996), 179.
6) Charmian Kittredge London, *Jack London and Hawaii* (London: Mills and Boon, 1918), 92.
7) Jack London, *The Cruise of the Snark* (Orinda, CA: SeaWolf Press, 2017), 92.
8) ロンドンのハワイを舞台とした小説の多くが白人の帝国主義的支配を暴き立てるものであったことを考えると，モロカイ島に隔離されたハワイ先住民たちが独立記念日を祝う様子は皮肉に見える。
9) London, *Cruise of the Snark*, 102-103.
10) Earl Labor, *Jack London: An American Life* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 2013), 276.
11) ロンドンの執筆時期については以下を参照。James Williams, "The Composition of Jack London's Writing," *American Literary Realism, 1870-1910*, 23.2 (Winter 1991), 64-86.
12) London, *Stories of Hawaii*, 57.
13) Ibid., 59-60.
14) Ibid., 60.
15) Ibid., 61, 65, 65-66.
16) 語り手はもともと「癩病に興味があった」人物として設定されており，ロンドンと語り手との共通点は無視できない。
17) London, *Cruise of the Snark*, 94.
18) London, *Stories of Hawaii*, 57.
19) London, *Cruise of the Snark*, 93.
20) Lev 13: 45-46.
21) London, *Stories of Hawaii*, 93, 40.
22) London, *Cruise of the Snark*, 167-168.
23) メルヴィルの『タイピー』に，病を持ち込んだ白人宣教師を批判する有名な一節が描かれているが，ロンドンはこれを念頭に置いていたはずである。Herman Melville, *Typee* (Evanston: Northwestern University Press, 1968), 124.
24) London, *Stories of Hawaii*, 52.
25) Ibid., 94.
26) スーザン・ソンタグ『隠喩としての病』富山太佳夫訳（みすず書房，1982年），6.
27) James L. Haley, *Wolf: The Lives of Jack London* (New York: Basic Books,

2010), 256.
28) Ibid., 262.
29) Andrew Sinclair, *Jack: A Biography of Jack London* (New York: Harper-Collins, 1977), 173.
30) London, *Stories of Hawaii*, 96.
31) 癩病が聖書では神に見放された印として捉えられ，近代にいたるまで生きながらの死者として扱われてきたことの歴史的研究としては以下を参照。Saul Nathaniel Brody, *The Disease of the Soul: Leprosy in Medieval Literature* (Ithaca: Cornel University Press, 1974).
32) Jack London, *The Scarlet Plague* (New York: Macmillan, 1915), 63.
33) Ibid., 153.
34) Ibid., 73-74; 78-79; 82.
35) 従来「赤死病」と訳されることが多いが，ここでは「赤」ではなく「緋色」ということばを重視しているために，あえて「緋色の病」と訳した。
36) Ibid., 35.
37) Isa 1: 18.
38) London, *Scarlet*, 105-106.
39) Ibid., 152.
40) Ibid., 144-145.
41) Ibid., 159, 171.
42) London, *Stories of Hawaii*, 41-42.
43) Ibid., 96.
44) Ibid., 93, 93.
45) Ibid., 101.
46) Jeanne Campbell Reesman, *Jack London: A Study of the Short Fiction* (New York: Twayne Publishers, 1999), 91. ほかにもBerkoveはこの作品をアジア人を見下した作品ではなく，むしろ西洋諸国の残虐さを描いた作品であると読んでいる。Lawrence I. Berkove, "A Parallax Correction in London's 'The Unparalleled Invasion,'" *American Literary Realism, 1870-1910*, 24.2 (Winter 1992), 33-39. これらの意見に対してSwiftは反論し，ロンドンには白人至上主義的側面が併存していることを指摘している。John N. Swift, "Jack London's 'The Unparalleled Invasion': Germ Warfare, Eugenics, and Cultural Hygiene," *American Literary Realism*, 35.1 (Fall 2002), 59-71.
47) Jack London, *The Strength of the Strong* (New York: Macmillan, 1914), 72.
48) Ibid., 84, 88, 88, 88-89.
49) Métraux, 310-315.
50) Ibid., 83.

Tropical War of Leprosy: Representations of Diseases in Jack London's Writings

TAKANO, Yasushi

Critics have continually been baffled by Jack London's contradictory representations of racial problems. Occasionally, he unabashedly exhibited his position as a white supremacist, but in some of his writings, he suddenly displayed heartful sympathy toward non-white races, especially those oppressed by Western imperial domination. The aim of this paper is to highlight his racial attitude, which was greatly influenced by his observation of the lepers he encountered in Hawaii during his round-the-world-cruise on the Snark.

Leprosy and its trope seem to have fascinated London, especially after his visit to Molokai; a place where Hawaiian lepers were segregated and treated by a US government medical facility. While London wrote many essays and stories about leprosy following this visit, my great interest in these texts lies in his contradictions about the disease. Following his visit to Molokai, his first reference to the disease was in an essay titled "The Lepers of Molokai," in which he insisted "that the horrors of Molokai, as they have been painted in the past, do not exist." However, his subsequent short stories about leprosy in Hawaii convey a contradictory statement: Molokai is portrayed as "the horror" that separates lepers from their families and confines them for life. This paper contends that this is not a result of a mindset change in London, but a symptom of inner conflict between his perception and the reality of the disease. Under the contemporary influence of Social Darwinism, he considered the white race as immune to leprosy because it had undergone natural selection to become the fittest. However, undeniable evidence of whites who had contracted leprosy haunted London so persistently, that he could not ignore the possibility of contracting the disease. Thus, he fought against the leprosy tropes that unnecessarily condemned the infected.

Following the Hawaiian experience, London became haunted by the

possibility of contracting leprosy, which strongly influenced his writing. *The Scarlet Plague* was written shortly after he abandoned the cruise with the Snark, because he believed he had contracted what he at the time believed to be leprosy, but later turned out to be just psoriasis. This short novel describes the strong tropes from ancient times concerning leprosy as defective. The narrator, Professor Smith, who accepts those tropes without question, believing that the disease is meted out to lower-class people as a punishment for their immoral and violent behavior, but in truth, the disease attacks indiscriminately, disregarding class hierarchy. London perhaps knew about the indiscriminate nature of the disease very well; however, he could not escape from this widely accepted punitive trope. Thus, he inevitably retained the differentiation between a white and a non-white, or a dominant and a submissive person. This unresolved tension led to ambiguity and contradiction in his writings about race and disease.